

ズーム・アップ・カメラ・アイズ

# 世界屈指のギャラリー 「エルミタージュ美術館」

The State Hermitage Museum, one of the world's best galleries

(ロシア、サンクトペテルブルク)

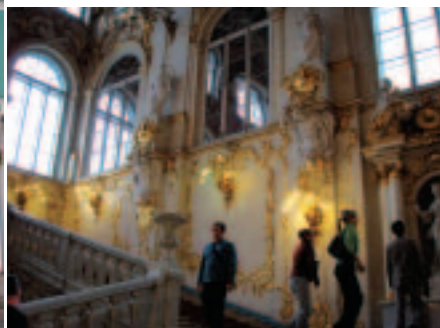
## Consultant 会誌編集専門委員会

### 1—サンクトペテルブルクの顔

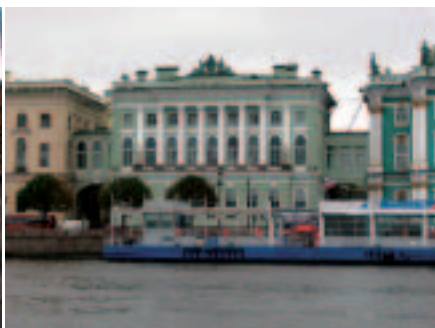
ピョートル大帝によって建設され、1712年から約200年間ロシアの首都ともなった計画都市サンクトペテルブルク。この地にサンクトペテルブルクの顔とも言える「エルミタージュ美術館」がある。美術館は18世紀中頃から約100年の間に建設され、「冬宮(冬の宮殿)」「小エルミタージュ」「旧(大)エルミタージュ」「エルミタージュ劇場」「新エルミタージュ」と呼ばれる5つの建物で構成されている。展示室だけでも400以上あり、300万点を超える美術品が保管されている。最初から美術館として建設されたのではなく、元はロマノフ王朝の皇帝の宮殿であった。しかしその建設の歴史を紐解くと、成るべくして美術館になったとの印象を受ける。



■写真2—バロック様式の「冬宮」の美術館入口



■写真3—謁見に来た人が上った大理石の「大使の階段」。現在は美術館見学のスタート地点



■写真4—美術館発祥の建物となる「小エルミタージュ」



■写真1—ネヴァ川から眺める「冬宮」全体

### 2—建設の歴史

皇帝の住まいとして1735年に「冬宮」は完成するが、エリザベータ女帝時代にイタリアの建築家ラストレリにより、1762年、バロック様式で再建される。そして歴代の皇帝たちは権威の誇示——自らの栄光と財力のシンボルのため、多くの美術品を収集し宮殿に飾るようになる。この冬宮は1837年の火災で宮殿内部が焼失したものの、同年に復元されている。現在の冬宮は、基本的にはラストレリが設計した建物である。冬宮の最大の見所はネヴァ川と宮殿広場に面した建物のファサード(正面)である。壁面を白、水色、金色で塗り分け、付け柱や凝った意匠の窓枠、屋根の彫像などにその特徴がある。また、ラストレリはピョートル大帝夏の宮殿(ペテルゴフ)も設計している。

次の女帝エカテリーナ2世は、親しい客人たちと過ごす隠れ家的な場所——エルミタージュ(フランス語で隠れ家)を求め、1775年、冬宮の東側に「小エルミタージュ」と呼ばれる建物を増築する。そこに美術ギャラリーを設けたことで、現在の美術館発祥の建物となった。小エルミタージュは長い廊下状の美術ギャラリーとパビリオンと呼ばれる広間から成り立っている。1階の屋上には空中庭園と呼ばれる細長い庭がある。

エカテリーナ2世はその後も美術品を大量に収集し続



■写真5—「旧エルミタージュ」の建物

■写真6—「エルミタージュ劇場」と冬運河(手前)

■写真7—冬運河と「新エルミタージュ」(左の建物)

けたため、1787年、新たに「旧エルミタージュ」と呼ばれる建物が小エルミタージュ東側のネヴァ川に沿って増築された。また前年には「エルミタージュ劇場」がさらにその東側——サンクトペテルブルク建設当初からある冬運河を挟んで建てられている。これは宮殿専用の劇場であり、エカテリーナ2世自らが制作・脚本した演劇が上演されていたと言われている。現在ではチャイコフスキーの『白鳥の湖』などが上演され、一般の人々も観劇できるようになっている。

その後も多くの美術品収集を続けたことから、小・旧二つのエルミタージュでは手狭となり、1852年、旧エルミタージュ南隣の宮殿広場に面して「新エルミタージュ」が建設される。ここはそれまでの建物とは異なり、公共美術館として完成させた。しかし入館するためには制限があり、許可証が必要であった。比較的自由に入場ができるようになったのは1863年からと言われている。実はエルミタージュは1770年代の頃から、特別許可さえあれば見学することができた。その頃の見学者は美術愛好家、外国人、画家、美術アカデミーの教師や学生などで、模写も可能であった。

1917年のロシア革命後、エルミタージュは国有財産となり、第二次世界大戦を乗り越え今日に至っている。

### 3—現地を訪れて

外から見る建物は長く大きく、ネヴァ川に沿って西から冬宮、小エルミタージュ、旧エルミタージュ、エルミタージュ劇場の建物が並んで見える。建物全体を望むには、ネヴァ川をクルーズする船に乗るのが良い。

美術館の入口は冬宮のネヴァ川に面したファサードにある。館内での撮影は可能だが、別途料金が必要であり、フラッシュ撮影は禁止されている。不思議なことに館内には、売店とは別にパンフレットやガイド本を数冊持って売り歩いている人が相当数いる。もちろん日本語のものもある。さらに売店よりも5割以上は安いとのことである。

すべてを短時間で見ることは難しいが、一部の展示品を眺めるだけでロシアの歴史を感じとることができる。

なお閉館時間になっても、日本の美術館と違い親切なインフォメーションなどはない。次々と照明が消され、部屋の扉が係員によって旋錠されていく。帰り道はおのずと限定される。そしてこの時間になると、個人の売り子は店じまいして誰もいない。結局、売店でパンフレットやガイド本を購入することになる。出口は入口とは反対側、冬宮の宮殿広場側となる。

古い建物を維持していくためには、当然補修などが必要になる。冬宮の宮殿広場側のファサードは、足場が組まれ補修中であった。こちら側の冬宮のファサードは、旧参謀本部などの周辺建物と外観色が異なっているため、補修後は外観色が変わるかもしれないとのこと。ただし公式発表があったわけではなく、あくまでうわさであり、「当局」の秘密のようである。

(文章 塚本敏行)

〈参考資料〉  
1)「エルミタージュとサンクト・ペテルブルク」ユーラシア・ブックレットNO.3 富田知佐子 2004年4月 東洋書店  
2)「世界遺産58 サンクト・ペテルブルクと周辺の歴史的地区」2001年12月 講談社

〈取材協力〉  
1) Sergej Bulatsev (通訳ガイド)

〈写真提供〉  
写真1 松田明浩  
写真2、4、5、6 塚本敏行  
写真3、8 藤井千晶  
写真7 岩田剛彦



■写真8—宮殿広場に面した「冬宮」のファサード(補修中)